令和４年度 地域力パワーアップ大会
～まちづくり×防災について考えよう～

日時　令和４年８月６日（土）１０時００分～１２時００分
場所　松山市総合コミュニティセンター　キャメリアホール（定員 500 名）
主催　松山市、松山市自主防災組織ネットワーク会議

出席者

松山市長　野志　克仁
松山市自主防災組織ネットワーク会議　会長　吉金　茂
松山市女性防火クラブ連合会　会長　渡部　真紀子
松山市坂の上の雲まちづくり部 部長　家串　正治
松山市総合政策部防災・危機管理担当部長　藤岡　徹
松山市消防局 局長　金澤　英雄
松山市コミュニティ・アドバイザー　若松　進一
松山市コミュニティ・アドバイザー　前田　眞
参加者　２２１名

備考

・屋外に風早活性化協議会の北条鯛めし、五明地区まちづくり協議会のキッチンカー（ソフトクリーム）、松山市女性防火クラブ連合会のマドレーヌの出店あり。

次第

・挨拶
・来賓紹介
・香川大学創造工学部　磯打特命准教授による基調講演
　「防災から始めるまちづくり　まちづくりから始める防災」
・素鵞地区まちづくり協議会の事例紹介
　「安全・安心なまちを目指して」
・パネルディスカッション
　「まちづくり×防災～みんなが住みよいまちを目指して～」
・松山市コミュニティ・アドバイザーからの講評

内容

1. 挨拶　松山市長　野志　克仁

2. 来賓紹介

3. 香川大学創造工学部　磯打特命准教授による基調講演
「防災から始めるまちづくり　まちづくりから始める防災」

・台風の数が増えている。生活に与える影響は大きい。
・また、南海トラフなども想定されており、今後地震などの天災に見舞われる可能性は避けられない。
・日本の国土全体のうち、住むことができる平野は３割。この３割に人が住んでいて、日本に住んでいる人の７割は災害に対して危険だとわかっている場所に住んでいる。国土交通省によると、愛媛県は９割の人が災害に対して危ない場所に住んでいる。よって、この国に住む限り災害に備えることは外せない。全ての方が取り組む必要がある問題である。
・倉敷市真備町は、水害と共に歩んで来たまち。その中でも、今回は川辺地区の事例を紹介する。川辺地区は平成３０年７月豪雨災害により、地区のほぼ全域が浸水し、大半の住民が地区外へ避難したため、まちに人がいない状況になった。一旦まちから人がいなくなると、町内会や地域団体の活動など、地域の繋がりを継続することが困難になる。倉敷市は現在も、７１名が避難生活を送っている。
・２０１９年から、住民有志による団体が自分たちのまちの未来を話し合う場として、「川辺みらいミーティング」という活動を行っている。この場は、人と人をつなぐコミュニティのハブにもなり、最初は２０名程度だった参加者が、６００人以上にもなった。
・子どもたちや町内会など様々な人を巻き込んで、防災まちあるきとマップづくりに取り組んだ。また「黄色いタスキ大作戦」を実施。「黄色いタスキ大作戦」とは、災害発生時に家の玄関に「無事です」と書かれた黄色のタスキを道から見えるように結ぶ活動。「自分の家は大丈夫、困っている状況ではありません」ということを知ってもらう目印になる。この黄色いタスキを使った訓練を昨年と今年の２回行っていて、川辺地区の参加率は６割を超えた。
・「黄色いタスキ大作戦」の効果の１つは、日常と非日常の時間の差を埋めること。各家庭事情があり、防災訓練のために時間を作って参加することはハードルが高いと思っている。一方、タスキを結ぶ訓練は、当日参加が難しい人は、前日から玄関に結んでおくなど、誰でも参加しやすい訓練としたため、参加率が高かったと考えられる。また、簡単なことではあるが災害について考えるきっかけにもなった。

・「黄色いタスキ大作戦」のもう１つの効果は、たくさんの住民が参加していることが目に見えてわかり、防災に関わる方のモチベーションや達成感につながったこと。また、かつてはプライバシーを尊重するあまり一歩踏み込めない状況があったが、タスキが結ばれていない家に声をかけるきっかけができた。
・防災活動は、被災を経験した地域にとって悲しみや不安を分かち合い、これから安心して過ごせるよう復興を次世代へつなぐ方策をみんなで考える場になった。
・次に、岡山県津山市城西地区の事例を紹介する。城西地区では、年１回「津山・城西まるごと博物館フェア」というイベントを開催していたが、それでは地域が変わらないのではという危機感を抱くようになった。そこへ公民館ができたことをきっかけに、その後城西まちづくり協議会が組織化された。城西まちづくり協議会では、「小規模多機能自治」として３つのテーマ別部会を中心に地域づくりに取り組んだ。
・平成２８年に内閣府地区防災計画モデル地区に選定され、月１回の定例会議を開催。災害を想定した研修や実動訓練を行った。
・地域の人が災害に対して不安に思うことに対し、自分でできること、地域で協力したらより成果がでること、行政と連携したほうがいいことの３つの内容に分けて意見を出し合ったところ、城西地区では、地域で協力したほうがいいことに焦点を当て活動をすることになった。
・今まで学んできた防災の知識をまちのみんなに知ってほしいと考え、城西地区の防災の教科書となる地区防災計画書を作成した。
・防災に対し、関心がある人は多い。防災をきっかけに人が集まり、新たな担い手の発掘につながった。また、防災力がまちの魅力となり、全国から視察が訪れ、それが地域の方のまちづくりのモチベーションにもよい影響を与えた。

4. 素鵞地区まちづくり協議会の事例紹介
「安全・安心なまちを目指して」

・令和元年９月に「素鵞地区まちづくり協議会準備会」を設立し、その後令和２年７月に「素鵞地区まちづくり協議会」を設立。
・子どもからお年寄りまでみんなの人権を尊重し、災害が起こった時も誰もが安全に、安心して暮らすことができるまちを目指している。
・素鵞地区で育ち、「犬ぞり使いの神様」と呼ばれ、アラスカとカナダの開拓史に偉大な足跡を残した一方、松山の母へ生涯仕送りを続けた親孝行な人でもあった和田重次郎の偉業と孝行の精神を伝えていくため、「和田重次郎顕彰会」と協力しながら和田重次郎の啓発活動をしている。
・和田重次郎顕彰碑がある石手川沿岸を、地元では「オーロラ遊歩道」と呼んで親し

んでおり、地元の小学生や中学生と花を植えたり、冬にはイルミネーションでライトアップしたりしている。

・防災避難訓練を毎年実施し、地域の危険箇所を点検するなど地域の安全を守る活動を行っている。

・素鵞地区まちづくり協議会ができる前から、素鵞地区では、防災力を高める活動に取り組んでおり、防災避難訓練では、防災士による避難所の宿泊体験や無線の運用訓練、災害を想定した避難所の運営など、工夫しながら訓練をしていた。

・平成２９年度からは拓南中学校で防災避難訓練を実施するようになり、広い運動場を使って中学生も参加し、訓練をすることができた。

・訓練では、住民だけでなく農協やフジにも協力をしてもらっていて、学生や企業、住民が一丸となって防災活動に取り組んでいる。

・平成３０年５月には、素鵞地区連合自主防災会と拓南中学校、拓南中学校 PTA の３者で「災害発生時における応援協力体制に関する協定」を結んだ。
これは、中学生が防災避難訓練へ協力することや大規模災害が発生した時の協力について取り決めた覚書。

・協定を契機に、素鵞地区自主防災連合会に拓南中学校３年生で構成された「防災中学部」が加わった。拓南中学校では、防災教育を実施していて１、２年生で防災について学び、３年生が実際に訓練に参加している。中学生が団体として自主防災組織に加入することは市内で初めてだった。

・活動を続ける中で、大規模災害が発生したときの死者は高齢者の割合が高いということを知る。避難をするときに支援が必要になるのは、高齢者や障がいのある人。そこで、防災に強いまちづくりには、地域のどこにどんな人が住んでいてどんな支援が必要なのかを知っている町内会長や民生委員の協力が必要だと考えるようになった。

・素鵞地区まちづくり協議会ができてから、地域の団体が集まる役員会を毎月行っているので、防災避難訓練に参加してもらうよう声をかけた。

・今年度、避難所運営マニュアルを作成する予定だが、素鵞地区では町内会長や民生委員にも協力してもらう。

・今後は、妊婦さんや小さいお子さんを連れた方など配慮が必要な人に、快適に避難所生活を送ってもらうにはどうすればよいかを考えていきたい。

・その他にも、避難をするときに支援が必要な人を、地域全体で守る体制がとれるように検討している。

・ノーマライゼーションの理念を持って、障がいのある人や高齢者まで素鵞に住む人が安全に、安心して暮らせるまち、そして、多様性を認め合い、誰もが自分らしく生き生きと暮らせるまちを目指していく。

5. パネルディスカッション
「まちづくり×防災～みんなが住みよいまちを目指して～」

コーディネーター：愛媛大学防災情報研究センター　副センター長　二神　透さん
パネリスト：聖カタリナ大学　学生ボランティアセンター　土佐　詩織さん
石井地区自主防災組織連合会　会長　和田　圭理さん
素鵞地区まちづくり協議会　安全安心部　部長　泉　治雄さん
香川大学　創造工学部　特命准教授　磯打　千雅子さん

以下３つのテーマでディスカッションを行った。
・「防災まちづくり」に多様な人が参加することの重要性
・「防災まちづくり」での連携の工夫
・「みんなが住みよいまちづくり」のために今日からできること

6. 松山市コミュニティ・アドバイザーからの講評
【若松　進一】

・まちづくりや防災について考えるとポイントが４つある。現在、人が１００歳まで生きる「超高齢化社会」である。そして、「人口減少社会」であり、「情報化社会」であり、「自然災害多発社会」であるということがまちづくりを進める上でのポイントになってくる。
・他人事ではなく、自分の身近に起こっていることととらえ、自分にできること、みんなでできることを考えていくことがまちづくり。
・パネルディスカッションの中で、学生さんが活動する動機は「楽しいから」と言っていた。楽しさや新しさ、美しさがないと人は集まらない。
・今、カブトムシが育つ環境を作るためにクヌギを育てる活動をしている。ドングリを拾って植えたのが、小さな苗になり、木が集まって林、森になる。森が育てば連鎖し、海の豊かさにもつながる。防災は陸や海の豊かさを守ることであり、これらはSDGsに該当する。
・自分たちのまちを守ることは、まちづくり協議会の活動につながっていく。これからどう生きるのかを考えながら、防災を通して、まちづくりやまちづくり協議会の活動を進め、住み良い松山市にしていってほしい。

【前田　眞】

・防災に限らず何事にも共通して言えることだが、当事者として意識を持つことが重要になる。

・先日、宇和島市の文京地区で避難所２か所 3,000 人の規模の避難訓練を実施した事例があった。取り組んでみると、人が多いため避難路が混雑してうまく避難ができないということが分かった。

・発表にもあったようにシミュレーションが大事。いざというときに自分の動きや役割などを想定しておくことが必要。

・どうすればいいのかを話し合いながら自分事化して考えられるような機会が重要になってくる。そのためには、様々な団体が集まるまちづくり協議会をうまく活用してほしい。

・みんなの話し合いで、それぞれの正解を作りだしていけばいい。これからもみんなで頑張りましょう。